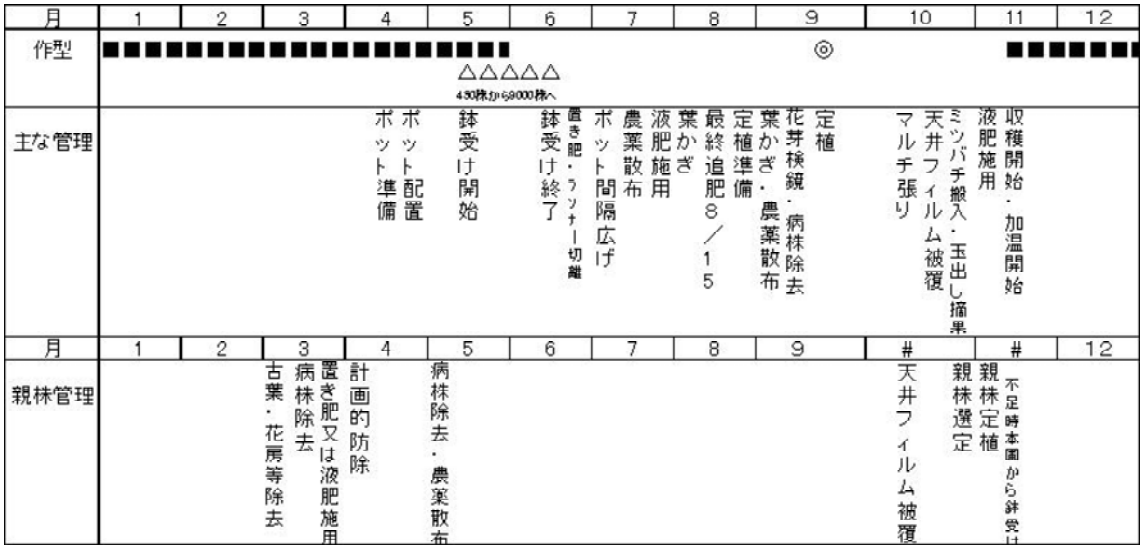
イチゴ　バラ科

原産地　北米東部原産の野生種と南米原産チリー野生種がオランダで交配された種間雑種から始まる

学名　Ｆragaria×ananassa Ｄuch

イチゴ（ひのしずく　夜冷短日育苗　平坦地）

栽培歴（夜冷短日育苗：平坦地域）



性状

ひのしずく普通ポット栽培を参照

技術体系

１　作型の特徴

夜冷短日育苗は、日中は苗に太陽光を当て光合成を行わせ、夜間は簡易施設（ハウスや収納庫）内で低温処理と短日処理を行うものである。イチゴに低温と短日条件を与えて花芽分化を促進する方法であり、最もイチゴの花芽分化条件に合致したやり方である。施設費はかかるが、この方法は、苗に無理なく、しかも確実に花芽分化を促進することができる。本県の夜冷短日育苗での目標とする花芽分化及び定植時期は、平坦地域で９月18日から20日頃である。

２　適応地域

全域（阿蘇、上益城地域の高冷地を除く）

３　栽培条件

(1)温度

生育適温は１７～２０℃で冷涼、温和な気候を好む。茎葉は低温や高温に対して比較的強いが、－５℃以下で凍害、５０℃以上で高温障害を受けやすい。花（雌ずいや花粉）は－２℃以下と３５℃以上で花粉の不稔が生じたり、奇形果や不受精果の原因となりやすい。

(2)光

光飽和点は２万５千Ｌｘで比較的低いが、厳寒期に低温、寡日照時期の栽培となり、果

実の着色が悪くなりやすいので、できる限り採光に努める。
(3)土壌条件
　土壌は、保水性と通気性に優れる肥沃な埴壌土や壌土が適しているが、比較的土壌を選ばないので水田等の粘質土や砂質土でも適切な肥培管理、地温や土壌水分を制御することで安定した生産ができる。pHは5.5～6.0が最も適している。
４　施設装備
(1)雨よけ、高設ベンチ育苗施設
(2)簡易夜冷短日処理装置
(3)連棟ハウス、単棟ハウス
(4)暖房機
(5)潅水施設
(6)予冷庫
５　経営目標
(1)収量　　４．５ｔ／１０ａ
(2)労働時間　1250時間／１０ａ
(3)所得率　　４０％
(4)経営規模　４０ａ
栽培技術
１　品種特性
　ランナーの発生は平坦地で３月上旬から始まる。草姿は立性で草勢は強く、休眠が極めて浅いため冬期無電照下でも株のわい化はほとんどない。頂花房の花芽分化期は、中央平坦地で９月２０日前後からで「とよのか」よりやや遅い。収穫始めは、頂花房が１２月上旬、第１次腋花房（第２花房）が２月上旬、第２次腋花房（第３花房）が３月中旬頃である。果形は短円錐～円錐形で、果実は大果であり、果肉は「とよのか」よりやや硬いが、果皮は軟らかい。果皮色は鮮紅色で光沢に優れる。香りや糖度は高く、食味が優れる。病害に対する抵抗性は特になく、「とよのか」に比べ炭疽病には弱い。

２　専用親株の管理（１０月～６月）
　炭疽病対策のため、管理は雨よけハウス下の高設育苗ベンチで行う。
(1)育苗圃場の選定と雨よけビニルの被覆
　冠水の恐れのない育苗圃場の選定と圃場内外の明きょ等排水対策の徹底が重要である。本圃定植後（１０月上旬）に高設ベンチの上に雨よけビニルを被覆する。春一番に備えて、十分固定するとともに通風をよくするために妻面は開けておく（※準高冷地は雨よけビニルを準備しておき、保温開始を３月下旬から行う）。
(2)資材準備
　親株の定植に備え、プランター等の消毒を行う。
(3)親株の準備（感染株の処分）
　雨よけビニル被覆下で炭疽病等などの病害感染株を処分し、無病で草勢の強いものを親株として選定し、本圃１０ａ当り約４００株を準備する。
(4)プランター又は大型ポリポットの設置
　プランターは長さ６０ｃｍ深さ１５ｃｍ程度（又は大型ポリポット径１８ｃｍ程度）で、

排水性を良くするため底網のあるものを使用し本圃１０ａ当たり１３４個（大型ポリポット４００個）を準備し、高設ベンチ上に設置する。床土は無病で排水が良好なものを用い、緩効性肥料を施用する。

(5)親株定植（１１月上旬）

植え付け時期は１１月上旬とし、植え付け本数は1プランター（床土１２～１３リットル）当たり３株とする。（大型ポリポットは１株／ポット）

(6)潅水

プランター上に潅水チューブを下向きに配置し、親株の乾燥に注意し、適度な土壌水分状態を保つように潅水を行う。４月上旬以降は株が旺盛になるので、徐々に潅水量を増やしていく。潅水施設は他の品種と別管理ができるように設置し、潅水は独立して行う。

(7)追肥

追肥は草勢が弱い場合に液肥を施用し、ランナーの発生を促進する。

(8)摘葉、摘花房

新葉が展開してきたら、古葉と花房の除去を早めに行う。

(9)病害虫防除

病害虫防除は、炭疽病、うどんこ病、ハダニ、アブラムシを中心に行う。炭疽病対策として防除は３月下旬～４月上旬頃から開始して、その後定期的に行う。

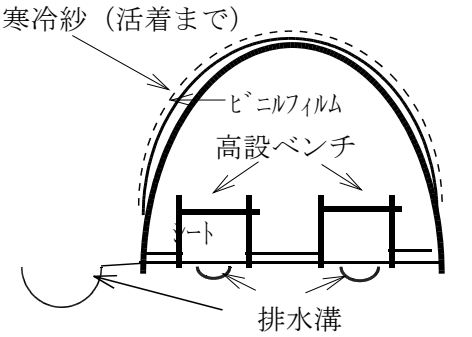
３．育苗

普通ポット育苗を基本とし、炭疽病に弱いため、雨よけハウス下の高設ベンチで育苗を行う。

(1)育苗圃及び高設ベンチの準備

育苗圃は日当り、通風のよい場所にし、高設ベンチを設置し、シートなどを用いて通路やベンチ下は排水不良とならないようにする。潅水が十分行えるような施設を準備する。ベンチの高さは７５ｃｍ以上が望ましい。なお、潅水は他の品品種と別管理ができるようにしておく。

※品種の特性上、炭疽病対策と生育面から別管理が必要である。



図．雨除けハウスと高設ベンチ育苗

(2)床土の準備

床土は無病で透水性の優れたものとする。育苗ポットは、φ１０．５ｃｍのポリポットを使用し、あらかじめ消毒を済ませておく。培土は使用前にｐＨ、ＥＣの調整を行う。ｐＨ5.5～6.5、ＥＣ0.2～0.5ds／cmを目安とする。

４月中旬から４月下旬までにポットに土を入れ、鉢広げのための間隔をとりながら高設ベンチに並べる。鉢受け前にポットに十分潅水してフィルムで被覆しておく。

(3)雨よけビニル被覆

炭疽病、根腐れ防止のために梅雨明け時まで雨よけフィルムを被覆する。株の充実を図るため梅雨明け後は取り除く。炭疽病の発生の恐れがある場合は定植期まで雨よけフィルムは被覆したままにしておく。このため、高温対策として古フィルム又は、梅雨明け後に遮光資材を利用する。

(4)採苗（植え付け）

〈空中採苗（挿し苗）〉

空中採苗の場合では、採苗時期は６月上旬に行う。採苗後は水に１～２時間浸漬後、水を切り１２～１３℃で２～３日冷蔵処理を行い、発根を促進した状態で植え付けを行う。子苗は本葉２枚程度展開したものが活着、その後の生育および作業性がよい。植え付けは、深植えにならないように注意する。植え付け時には子苗のしおれ防止のため寒冷紗を被覆するとともに、散水を細めに行う。寒冷紗は活着後に速やかに取り除く。長期間の遮光は苗質が徒長ぎみで軟弱となるため絶対行わない。

〈鉢受け（受け苗)〉

受け苗の場合は、高設ベンチ上で鉢受けを行い、４月中旬頃からポットを配置する。５月中旬頃から鉢受けを開始し、６月上旬までに終了する。最終鉢受けから約２週間後の６月下旬頃までに親株から切り離しを行う。本葉１～２枚、根が数㎜程度発根した苗を固定する

(5)鉢ずらし

植え付け（切り離し）後に活着したら、鉢ずらしを行う。草姿は立性であるが、草勢が強いので鉢の間隔は、１５ｃｍ×１５ｃｍ以上を目安に行う。間隔が近いと苗が軟弱、徒長となり、炭疽病多発の原因になるので注意する。

(6)施肥管理

活着後に緩効性肥料を置肥する。置肥量は１鉢当たり窒素成分で１５０ｍｇを目安とする。置肥の肥効は８月１０日までに切れるような置肥肥料を使用する。追肥は緩効性肥料の肥効が切れる前から約１０日間隔で１鉢当たり液肥４００～５００倍液１００ｍｌを施用する。置き肥の肥効が８月１５日を超えると頂花房の花芽分化が遅れるので厳守する。最終追肥は、夜冷短日処理開始７日～１０日前として以降は潅水のみとする。極端な肥料切れに注意して葉色計のＳＰＡＤ値３５程度を目安とする。定植時のクラウン径は１０～１１ｍｍの苗を目標にする。

置き肥の特徴

商品名	成分(N-P-K)	肥効期間	鉢当たりの量	備考
IB化成S1号	10-10-10	40～60日	3粒	降雨の影響
花むすめ	10-10-10	40～60日	1～2粒	降雨の影響
ジャンプ	7-8-6	20～30日	2粒	降雨の影響
ロング424-40	14-12-14	約40日	1g	温度依存
ビッグワン	10-10-10	50～60日	1粒	降雨の影響

(7)水分管理

ポット育苗では、潅水装置を設置する。鉢上げ後は鉢への潅水とともに葉水をかけて活着を促進する。潅水は育苗の全期間にわたって午前中に行い、夕方には鉢土の表面が乾くようにする。特に梅雨の豪雨、日照不足の時期に遮光率が高い資材を使用しているとポット培土が乾きにくく加湿による根の褐変症状で葉の展開が鈍くなることがある。天候を考慮したかん水管理に努める。また、育苗後半（８月）は夜間まで鉢土に過剰な水分が残ると徒長や炭疽病発生の原因になるので注意する。

(8)下葉かぎ

育苗期の下葉かぎはクラウンの肥大と伸長をはかるとともに、うどんこ病、ダニの耕種的防除に役に立つ。育苗の前期は本葉２．５～３枚、中期は３～４枚、定植直前は４．５～５枚を目安に葉かぎを行う。

(9)鉢もみ

潅水により鉢土が固くしまり排水性が悪くなった場合は、適宜鉢土をもみ透水性を良くする。特に育苗後半は、鉢もみを行い透水性を高めて鉢内の残存窒素濃度を低下させる。

(10)病害虫防除

育苗前半は特に炭疽病を対象とした防除を行う。炭疽病は気温２５℃、うどんこ病は２０℃前後から発生が多くなる。特に炭疽病菌は４月初旬から飛散するといわれ、うどんこ病は、親株の葉裏に多く発生すると葉が委縮して生育遅延になるため計画的な防除に努める。

昼温２０℃、夜温１０℃以上を超える時期になるとハダニ、アブラムシ等が発生しやすくなるので早期発見、適期防除に努める。ハウス周辺の除草も病害虫の発生源になるので除去する。

(11)夜冷短日処理方法

①処理時期

処理は８月２６日頃から開始して９月１７日頃までを目安に処理する。９月に高温が予想されるので９月１８日頃からの定植を目標にする。処理開始時期が早すぎると高温による定植後の株の生育不良や病害の発生及び果実が小玉になり、糖度不足等食味の低下が懸念されるので注意する。

１回目の夜冷処理を終了後、９月１８日以降に別の苗に夜冷処理を７日間程度行うことで頂花房の花芽分化を安定させることができ、施設の有効利用を図る。

②処理温度

処理温度は１５℃以下になるように温度を１０～１３℃程度に設定する。処理施設内に、最高最低温度計等を設置して処理温度を確認する（特に処理開始数日の温度を必ず確認)。

③処理時間

処理時間は午後５時から翌朝９時まで（８時間日長）とする。

④処理株数

処理株数は炭疽病等病害の恐れがあるので予定株数より１割程度余裕をもって処理する

(12)処理前の健苗育成

①夜冷短日処理施設の圃場周囲は排水対策を徹底して、床面上には防草シート等を敷く。
　施設入庫する時はポットを水稲播種箱のうえに置く。

②処理開始までにハダニ類、アブラムシ類及び炭疽病、うどんこ病等の病害虫の防除徹底を図る。特に炭疽病が発生している場合は拡大の恐れがあるので処理しない。

③入庫前に葉数を約３～４枚に整理する。

④入庫前に徒長防止のため、生育調整剤を処理する。

(13)処理時の管理と健苗育成

①処理期間中は病害虫の発生を十分観察して、早期発見、早期防除に努める。

②処理時の過潅水は徒長及び病害を助長するので、潅水ムラに注意して夕方には培土表面が乾くようなかん水管理を行う。

③期間中に葉かぎを１回程度行い、併せて病害虫の確認を行う。

④定植時の苗はクラウン径１０～１１ｍｍの充実した苗を育成する。花房数が２本以上の株の割合が多くなり、花数が増加するので、小苗では成り疲れが発生しやすい。

⑤炭疽病は処理中が発生しやすくなるため炭疽病対策を徹底する。

(14)花芽検鏡

平坦地域では９月１５日頃から検鏡を行う。検鏡により花芽分化を確認後に定植する。

４　本圃

(1)土壌消毒

連作地等で土壌病害の発生の恐れがあるので、８月中旬までに太陽熱消毒や農薬での土壌消毒を実施する。

(2)定植準備

８月下旬頃に本圃の土壌条件が良好な時に基肥の施肥、畦作りを行う。土壌水分が多く土を練るような畦作りは定植後の生育が極めて不良になるのでしない。畦作りがすんだら古ビニルを被覆して降雨による畦の崩れを防止する。

基肥施肥は１０ａ当たり窒素成分で１０ｋｇ以下とし、産地における「ひのしずく普通ポット栽培」の基準量より２割程度減肥する。なお、定植前の土壌分析の結果を考慮して決定する。追肥の時期と量は、生育等を見ながら行う。

※基肥量が多いと草勢が強くなり、頂果房に乱形果や奇形果が発生やすいので、特に注意する。

施肥量の目安　　(kg／10ａ)

	N	P_2O_5	K_2O
基　肥	6～8	8～15	4～10
追　肥	15	8	15
合　計	21～23	16～23	19～25

(3)定植

定植は検鏡により必ず花芽分化を確認してから行う。花芽分化程度が肥厚後期から二分期に達してから定植する。

(4)栽植様式と栽植密度

１畦当たり２条植えの外成り方式とする。ハウスのサイド側は１条植えでも良いが、外成りにする。畦幅は、花房の伸長が良く、生育がやや強いので「とよのか」より広くする。作業性を考慮すると畦幅は１２５ｃｍ前後が望ましく、最低１２０ｃｍ以上とする。１０ａ当たりの栽植本数は６５００～７０００株程度にする。条間は果房の伸長等を考慮し、２０ｃｍ～２５ｃｍとする。

※果梗が伸びやすい品種であるので、内成り方式では果実が葉陰に入り果実の着色が悪くなる。また、果実が重なりやすく、収穫作業等で果実にスレが発生しやすいので、外成り方式で栽培を基本とする。

栽植様式

ﾊｳｽ間口	畦　幅	畦数	株　　間	栽植密度（10a当り）
6.0m	120cm	5本	23～25cm	7245～6666株
5.4m	120cm	4.5本	23～25cm	7245～6666株
5.0m	125cm	4本	23～24cm	6956～6666株

(5)定植の方法

極端な浅植えは活着が悪くなるので「とよのか」並みの深さに定植する。

(6)定植後の潅水

定植後の潅水はクラウン部が乾かないように十分に行い、活着を促進する。潅水むらがあると活着やその後の生育が遅れるので注意する。定植後1週間はクラウン周辺部を中心に十分潅水する。定植時の苗に褐変等根傷みがみられる場合は、発根促進剤等を灌注する。

(7)定植後の管理

夜冷短日処理では、頂花房出蕾後に芯止まりが発生することがあるので、近隣株のランナー及び補植用苗の利用や摘果の徹底を図り、適正な温度確保及び施肥管理に努める。

(8)防虫ネットの設置

ハスモンヨトウ､タバコガ等の圃場侵入を防ぐためハウス周囲に防虫ネットを設置する。

(9)マルチ前の追肥

マルチ被覆前に緩効性肥料を１０ａ当たり窒素成分で３ｋｇ程度を目安に施用する。ただし､生育に応じて施肥量は決定する。その場合､第２花房の花芽分化の確認を必ず行い、追肥する。

(10)マルチ被覆

マルチの被覆は定植後２５～３０日（出蕾期）を目安に行う。マルチ被覆後は葉やけに注意し､速やかに潅水を行う。１０月の気温を考慮して高温の場合は可能な限り遅くする。張った後も、１０月中（最低気温が１０℃を下回る頃まで）は畦肩までマルチを上げておき、地温の上昇を抑える。

(11)天井ビニル被覆

ビニル被覆は開花始め期を目安に行う。１０月の気温を考慮して高温の場合は可能な限り遅く被覆する。ビニル被覆後はハウス内の温度が高くなりやすいので、サイドは十分に開放しハウス内の温度上昇を防ぐ。

(12)ジベレリン処理

ジベレリン処理は花梗の伸長が良いのでしない。

頂花房の果梗長（農研セ・農産園芸研究所・野菜研究室）（平成15年度）

品　種	第1果まで(cm)	最高長(cm)
ひのしずく	15.0	32.9
とよのか	16.7	26.8

注)「ひのしずく」はジベレリン無処理､「とよのか」はジベレリン10ppm約5mlを株中心部に1回処理.

(13)開花前の病害虫防除

開花前までにうどんこ病、ハダニ、ハスモンヨトウ、タバコガ等の防除を徹底する。防除は、ミツバチの安全性確保のため農薬使用基準に基づき適正に行う。

(14)ミツバチ搬入

交配はミツバチにより行う。マルハナバチは使用しない。ミツバチは頂花房が開花し始めたときに搬入する。単棟ハウスは各ハウスに１箱設置する。ミツバチの活動が強すぎる場合は、奇形果が発生する可能性があるので、巣箱の位置を調整する。

４月下旬頃以降に終了予定の20日前頃にハチ巣箱を片づける。

※マルハナバチを使用すると、花粉量が多いため開花前に過訪花となり、奇形果が発生するので使用しない。

※奇形果防止対策（過訪花対策）

ひのしずくは、とよのかと比べてミツバチが訪花しやすい、特にハチ巣箱がハウス内にあり、ハウス面積が小さい施設又は花が少ない時期等ではミツバチが訪花する回数が多く葯がほとんどなくなることがある。これにより受精がうまくいかず種子が形成されなかったり、花床部が傷つき部分的に肥大しなくなり奇形果が発生したと考えられる。ハチの過訪花を防止するため、ハウス外に設置し、出入り口をハウスから十数ｃｍ離すことで改善できる。（事例による）

厳寒期のミツバチの活動不良や農薬散布等での不受精による奇形果の発生にも注意する。

(15)温度管理

頂花房の着果から肥大期までは「とよのか」よりやや低めの温度管理とする。最低温度が７℃を下回る時期からサイドビニルを開閉し、夜間の保温につとめる。この時期は日中はハウス内が高温になりやすいので、換気を行い２０～２２℃で管理する。頂花房着果後は基本的に最低５℃を維持するように暖房機を設定するが、１月上旬から２月上旬の厳寒期はハウス内の温度は最低６℃を維持するように設定する。１２月下旬から２月上旬の日中の温度は２２～２５℃を目安に管理する。

２月下旬以降は最低温度は５℃とし、２月下旬からは日中温度を上げないよう換気を徹底する。３月中旬以降は、夜温が高い（１０℃を超える）場合は夜間サイドビニルは解放し、日中は換気を十分行う。

温度管理の目安（中央平坦地）

時　　期	日　中	夜　間	換気温度
ﾋﾞﾆﾙ被覆～頂花房出蕾	22～24℃	7～8℃	7℃以上で解放
頂花房出蕾～開花	20～22℃	7～8℃	15℃
頂花房着果～肥 大	20℃	5℃	15～18℃
頂花房成熟期	※18～20℃	5℃	15～18℃
厳寒期（12下旬～2月上旬）	22～25℃	6℃	22～23℃
2月中旬～2月下旬	20℃	5℃	18～20℃
3月上旬～3月中旬	18℃	5℃	15～18℃

※準高冷地は20℃

(16)電照

休眠が極めて浅く、無電照下でもわい化しにくいので電照はしない。

※電照条件下での栽培では、第３花房以降の花房が出蕾しない可能性がある。また、厳寒期の着色が悪くなり、第２花房の花房が伸びすぎて管理が困難となるので電照はしない。

(17)水分管理及び液肥施用

潅水は定植直後の活着や発根を促進する時期や果実肥大期から収穫期にかけて吸水量が増加してくる時期には、潅水を頻繁に行い、土壌水分量を多く維持する。ただし、低温期の過剰潅水は灰色かび病の発生を助長するため注意する。１回当りの潅水量は「とよのか」と同等で問題はないが、２月下旬以降草勢が強くなり、土壌が乾きやすくなる時期（特に畑土壌）からは、土壌水分の変動を少なくするために、細めに潅水を行う。変動が大きい場合に果実の一部に浮き種が発生する場合があるので注意する。テンションメーター（条

の株と株の間で深さ10㎝）での潅水の目安は、定植～活着期はｐＦ1.8を潅水点にする。開花期～収穫期はｐＦ1.8～2.0としてｐＦ2.0を潅水点とする。１月～２月中旬はｐＦ2.0～2.2としてｐＦ2.2を潅水点とする。潅水は一度に多量の潅水は禁物で、少量多回数の潅水とする。

液肥施用は、頂花房の頂果が緑熟期頃から開始する。１ヶ月に窒素成分で２ｋｇ／１０ａ程度を３～４回に分けて定期的に施用する。また、第２花房収穫１０日前頃からは必ず液肥施用を行い、食味低下の抑制と草勢を維持する。必要に応じてカルシウム剤の施用を行う。

※春先の糖度低下軽減対策としても液肥施用を実施する。

(18)下葉かぎと芽かぎ

開花結実期間中の葉数は１２枚～１５枚を確保する。「ひのしずく」は「とよのか」に比べて葉の展開が早く、草姿が立性であり葉の寿命は比較的長い。栽培期間中は基本的には老化葉や病害虫に侵された葉を取り除きながら管理する。下部の弱い芽は早めにかぎ取り、芽数は第２花房まで２芽以内で管理し、第３花房以降は２～３芽を目標に管理する。

(19)摘花（果）

「とよのか」に比べて花数は少ないが、花房数と花数に応じて摘花（果）を行う。頂花房は花房数が１つの場合は、摘花はほとんど必要ないが、花房数が２つ以上の場合は花の強さに応じて１花房当たり７～８果着果を目安に２～３花程度摘花を行う。特に夜冷短日処理では頂花房は花房が２つ以上になりやすく着果数が多くなるので摘果を徹底する。第２花房も頂花房と同様に行うが、株の草勢や花の強さに応じて調整する。第３花房以降は、花数が１花房当たり４～７花程度と少なくなるが、弱い花は１～２花程度摘花を行う。

頂花房着花数（農研セ・農産園芸研究所・野菜研究室 ）

品　種	平成14年度	平成15年度	平成16年度
ひのしずく	14.0(1.4)	9.9(1.1)	8.1(1.1)
とよのか	16.0	13.9	11.6

注）(　)内は平均花房数

(20)玉出し

花房の伸長が良く「とよのか」より着色は良いが、葉陰では着色が悪くなるので果実に光が当たるように各花房の緑熟期までには玉出しを行う。草姿が立性であるので、「とよのか」ほどの玉出しは不要であり、竹串等を用いて行う。

(21)収穫

着果から収穫までの成熟日数は「とよのか」とほぼ同等である。着色始めから収穫適期までがやや早いので、収穫遅れには注意する。収穫が遅れると果実の傷みが発生しやすいので、着色基準を遵守する。収穫は果実の傷みを防止するため、果実温度の低い朝の涼しい時間帯に行い、気温が高い時期は２日に１回は、収穫を行う。

(22)予冷

収穫後の予冷は「とよのか」と同様に行う。

①使用期間はは全期間とする。

②入庫は収穫後早めに行う。収穫に時間がかかる場合はこまめに入庫する。

③設定温度は２℃を目安とする。

(23)春先からの病害虫防除

うどんこ病、アザミウマ、ハダニ、アブラムシ、コナジラミ等を中心に防除を行う。昼温２０℃、夜温１０℃以上を超える時期になるとアザミウマやハダニが発生しやすくなるので早期発見、適期防除に努める。特にアザミウマは花粉を好み、花の中に発生しやすいのでよく観察する。また、ハウス周辺の除草も病害虫の発生源になるので除去する。

(24)果実傷み防止対策

収穫時間は早朝とし、果実温度が上がらない時間帯に収穫を終える。３月期からは収穫のローテーションを短くし、着色程度を考慮した収穫を行い、できるだけ２日に１回は収穫を行うように努める。

温度管理は、２月中旬からは日中の温度を上げないよう換気を徹底する。３月中旬以降は夜温が高い場合は、夜間サイドビニルは解放し、日中は換気を十分行う。

潅水は少量多回数とし、収穫後に行う。天候が悪い場合は絶対潅水を行わない。草勢が強くなる２月中旬以降は、特に傷み果防止の管理を厳守する。

頂果房の収穫が終わる時期に古葉等の葉かぎを行い、草丈を抑える管理を行う。さらに、やや草勢が強くなる２月中旬以降までには必ず葉かぎを行い、古葉を除去し、草丈を高くしないようにする。

「ひのしずく」着色の変化(平成15年度)

収穫時		調査時
4～5分	→	7～8分
6～7分	→	7～9分
8分	→	8分～完着
9分	→	9分～完着
完着	→	完着

注）階級：Ｌ

収穫：12月20日9:10～9:15

調査：12月24日6:40～7:30

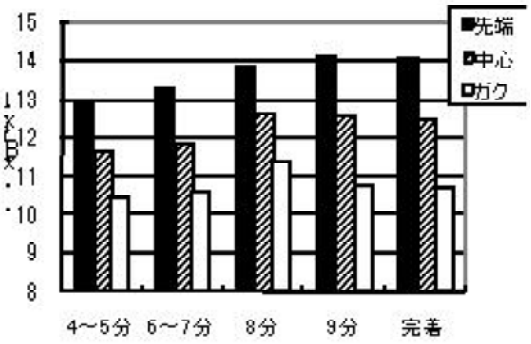


図. 着色程度と糖度

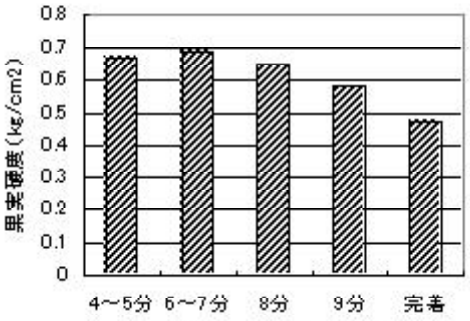


図. 着色程度と果実硬度